

現代推理

小説論

権田萬治



現代推理小説論

1985年 1月15日 初版第1刷発行
1985年 3月15日 初版第3刷発行

著 者 権田萬治

発行者 栗生一郎

装幀者 小倉深雪

印刷所 明和印刷株式会社

検印廃止 © Printed in Japan 1985

ISBN4 - 476 - 03116 - 1

発 行 所 株式 第三文明社

東京都千代田区三崎町 1-1-9 (〒101)

替振 東京 5-117823 TEL (294)8731(代表)

現代推理小說論
目次

I

現代推理小説論	7
現代推理小説の諸問題	20
四つの影	37
推理小説ブームの社会的意味	50
現代推理小説と医学	68

II

名探偵はどこへ行ったか？	91
魅力ある犯罪者の肖像を	97
推理小説はどこへ行く	105
現代推理小説と文学	112
ヒラリー・ウォーの「名探偵」論について	118
現代推理小説におけるトリックの位置	124
推理小説の批評は可能か？	131

ネオ・ハードボイルド派への疑問	138
栗本薫の『ぼくらの時代』について	145
歴史推理の問題点	152
論争「スターリン暗殺計画」	159
歴史推理における事実と虚構	169
III	
推理小説の新しい傾向	179
警察小説の変化	184
推理小説の舞台裏を知るために	188
誘拐推理小説の面白さ	192
実録ものの可能性	196
愉快な名探偵もののパロディ	200
悪女の魅力	204
推理小説より楽しい評伝	207

IV

書物にみるエスケープ	213
さよなら、ドラキュラ伯	228
怪奇幻想小説の擁護	232
誰が龍馬を殺したか？	235
コン・ゲーム小説の楽しさ	251
わびしいスパイの窓際族	254
悪女のいる川辺	258
名探偵は美食家か？	261
V	
処女作時代の作家群像	267
推理評論への道	283
あとがき	296

現代推理
小説論

権田萬治
第三文明社

現代推理小說論

現代推理小説論

現代日本の推理小説について最近多くの批判がなされている。たとえば生島治郎は「現代を探る推理小説」(『国文学』昭和五十年三月臨時増刊号)の中で、「松本清張氏の亜流のような風俗小説が氾濫はじめ、あるいは、現実の事件をなぞった作品が社会派推理小説などというレッテルをはられて、次々と出版された。これでは、トリック偏重のパズル小説が読者に厭きられたのと同じような結果を招くのは当然である」と述べている。まことに的確な批判だが、それでは今後日本の推理小説はどのような方向を目指すべきであろうか。となると、頭脳明晰な生島治郎といえども必ずしもその未来像はそれほど明確ではないようである。氏が、主張しているのは要するに、フィクションを武器にした新しい推理小説の創造ということにつきるように思われる。

しかし、この点についていえば、当の松本清張自身がすでに八年前に新本格推理小説という主張を掲げていたことを忘れてはなるまい。「今や推理小説は本来の性格にかえらなければならない。社会派、風俗派はその得た場所に独立すべきである。本格は本格に還れ、である。しかし、ここまでの推理小説の形式・内容が、戦前のそれにもどるべくもない。社会派・風俗派の通過は、ある意味にお

いて推理小説の視野をひろげ、対象を掘り下げ、程度を高めたことである。技術も前進させたと思っている。現時点で本格ものに還るということは、以上の基礎に立ったものであり、それからの新しい発展である」というのが氏の立場である。

いわゆる松本清張以後の推理小説は、論理による謎解き小説をはじめ、ハードボイルド、犯罪小説、スパイ・スリラーなど多彩なジャンルが開花し、文壇において明確な市民権を獲得した。しかし、そのことが、推理小説と一般の小説との境界線をあいまいにし、推理小説の風俗小説化を深めたことは否定できない。松本清張の発言はそのような反省の上に立ったものだが、「本格に還れ」という主張も推理小説の原点である「謎」を改めて振り返れということであって、必ずしもいわゆる本格ものだけを重視するということではなかったようだ。その証拠に松本清張の責任監修した新本格推理小説全集には、ハードボイルドもスパイ・スリラーもはいっているのである。

したがって、現代推理小説は従来の本格推理小説中心の概念によっては単純に割り切れなくなっている。とすればどのような定義が可能であろうか。論理による謎解き小説からハードボイルド、犯罪小説、スパイ・スリラーに至る広範な分野を一つの概念で包括することはきわめて困難なような気がするが、私は推理小説を、恐怖に支えられた謎、あるいは謎に支えられた恐怖を主題とする小説と定義することによって、これらの現代推理小説の多彩な試みに大きく網をかけられるのではないかと考えている。この定義と各ジャンルがどういう関係にあるかについては「四つの影——ジャンルと方法」(『国文学』前掲号、本書三七ページ参照)に譲るとして、今後の新しい推理小説が目指すべき方向について私なりに考えて見たい。それは、松本清張の主張する「新本格推理小説」の延長線上にあると

いってもよいが、「新本格」といふといわゆる本格ものだけに適合する概念のように誤解されるおそれがある。ここでは本格ものを中心になるべくハードボイルドや犯罪小説などにも適合する考え方を展開して見たい。

まず、新しい推理小説の創造には新しい時代にふさわしい魅力的な探偵役と個性的な犯罪者の創造が必要ではなからうか。高木彬光は『隨筆探偵小説』の中で、「要するに、探偵小説の興味は、善と悪との対立である。光と影との拮抗である」と述べているが、これまでの推理小説の古典的名作の大きな魅力が名探偵と兇悪な犯人の対決にあつたことは否定できないように思われる。フィルポッツの『赤毛のレドメイン家』で名探偵ビーター・ガンスと対決するマイクル・ペンディーン、あるいは、ヴァン・ダインの『僧正殺人事件』に登場する名探偵ファイロ・ヴァンスの好敵手ディラード博士、あるいはシムノンの『男の首』の中に現われ、メグレ警視の心胆を寒からしめる天才犯罪者ラデックなど、それぞれが独特の個性的な魅力を発散させている。

もちろん、科学捜査の進んだ現在、いわゆる明哲神のごとき名探偵は存在し得なくなったことは事実である。その意味での名探偵の時代は終わったともいえるだろう。しかし、推理小説が犯罪の謎を主題とするかぎり、犯人もいれば探偵役も存在するというのは、否定しえない事実である。とすれば、それらの主要な登場人物に推理作家はもっと関心を払ってもよいのではあるまいか。

といつても、大時代な善玉、悪玉の対決劇にしろといつてはいるわけではない。人間くさい、酸いも甘いもかみわけたメグレ警視のような、あるいは時代の甘美な夢を背負って生きているフィリップ・マローウのような、実在感のある探偵役の創造が必要ではないかと思うのである。

松本清張以後、探偵役に実在感を持たせることが徹底し、刑事以外に新聞記者、主婦など平凡な市民が登場したが、どうも強烈な個性的魅力に欠けているといわなければならない。江戸川乱歩の明智小五郎や横溝正史の金田一耕助のような古めかしい名探偵は今や実在感が感じられなくなっているが、それ以外の個性的な探偵役というと、高木彬光の検事霧島三郎、鮎川哲也の鬼貫警部、陳舜臣の陶展文、結城昌治の郷原部長刑事、生島治郎の元刑事志田司郎などくらいしかすぐ頭に浮かばない。この点都筑道夫は終始一貫新しい探偵役の創造を目指し、ゴーストハンター物部太郎や自称詩人のキリオ・スレイなどユニークな性格設定を試みている。ある意味で前衛的ともいえるが、もともと人工性を意識したのだから、実在感はどうしても希薄にならざるをえない。

神のごとき名探偵と逆の行き方として、ジョイス・ポーターのかんしゃく持ちでわがままなドゥヴァー警部のような、名探偵らしくない名探偵という試みも面白いだろう。日本でも海渡英祐が和製ドゥヴァー警部ともいえるべき、吉田茂警部補シリーズを発表しているが、いわゆる刑事コロンボの流行などと合わせて考えると、さまざま可能性が考えられるような気がする。

一方、個性的な犯罪者の肖像は、推理小説の犯罪小説化が進めば進むほど強く要求される要素だろう。陳腐な人物による陳腐な犯罪を描いた犯罪小説などはおおよそ犯罪小説とはいえないものであるが、日本の犯罪小説にこの種のものが多く見られるのはまことに残念である。

犯罪者の肖像という点で、私はローレンス・サンダースの『第一の大罪』の主人公ダニエル・ブランクの孤独な姿にも感心した。インテリで大出版社の販売部長をしているダニエル・ブランクのコンピュターに囲まれた無味乾燥な日常生活と異常な倒錯した性生活。まさにこれはこれまで描かれた

ことのない新鮮な犯罪者像である。悪の魅力というが、これらの犯罪者は必ずしも頭脳明晰でなくともいいのである。

もう一つ注目すべき試みとして、マイ・シューヴァル、パール・ヴァールの『ロゼアンナ』がある。これは平凡な人間が兇悪な犯罪者に変身する一瞬を鮮かにとらえた優れた警察小説だが、同時に被害者の若い、男あさりをする米国女性の肖像をくつきりと浮かび上がらせている点が新鮮である。犯罪学でも最近では、被害者学という分野の研究が進んでいる。つまり、犯罪の被害を受ける人間の特性を分析するものだが、犯罪小説が多様化する中で、こういう人間像を描く試みも続けられるのではあるまいか。

こうして見ると、推理小説においても人間を描くということがはなはだ大切なことがわかって来る。かつてフィリップ・ヴァン・ドールン・スターンは「袋小路の死体事件」という優れたエッセイの中で、「探偵小説は文学とは何の関係もないという主張をもった批評家もいる。それは単に、数時間のあいだ、読者に想像上の殺人事件を解くことに耽らせ、したがって、現実の死が目ごとに差し迫ってくる現実の世界から逃避することができるようになることで、読者をたのしませるための知的パズルにすぎないというのである。しかしこれは、必然的に文学のかたちをとるものについての、このうえなく浅薄な見方である。探偵小説が単にパズルにすぎないのなら、それを、人物や背景をもち、立派な作品にしようとする何らかの企図を伴った完全な本のかたちにする必要はないだろう。純粹なパズルの要素は、数百語で書いてしまうことができよう」と述べている。

私は推理小説は必ずしも第一級の文学である必要はないと考えるが、エンターテインメントとして